

『ゴースト・ゴースト・ウライター』

夜。

ホテルの一室。シングル。

決して広くはない。そして、いささか古びている。

上手、手前には横長の机がこちら側に付いている。

下手手前には簡単なソファと脚の短い丸テーブル。

ソファ脇に小さな冷蔵庫がある。

中央奥には、シングルベッド。

下手脇には出入口につながる通路がある。

上手長机に三人が並んで執筆している。全員こちら側を向いている。

上手から、安孫子弘、馬場美津子、千葉真。

千葉の目の前には、原稿用紙・書類やシナリオ雑誌数冊が置かれている。

安孫子、馬場の近くにそれぞれ書き上げた原稿用紙が積まれている。

そして、馬場と千葉の間あたりに、携帯電話。

”(携帯電話・着信バイブ音) ”

千葉、画面を確認し、やり過ぎす。馬場も画面を確認するだけ。

着信音止まる。

千葉、執筆を止め、それまで書いていたメモを読み上げる。

千葉 時は慶応三年、大政奉還を成し遂げたばかりの坂本竜馬は、京都の近

江屋にいた。同郷の土佐藩出身・中岡慎太郎と、これから誕生する新し

い日本の行く末について、大いに語り合っていた。そして……そして、

そして……？ そして何なんだよお

馬場 え、何、それは質問？

安孫子 苦悶だろ

千葉 OK、……OK。ちよつと整理しよう

馬場 どうぞ、ご自由に

千葉 近江屋の二階に竜馬がいますう

馬場 はい

千葉 中岡慎太郎と酒飲んでますう

馬場 はい

千葉 二人を暗殺しに京都見廻組が来ましたあ

馬場 はい

千葉 で？

馬場 は？

千葉 で、どうなの？

馬場 どうって、暗殺したりされたり、仲良くやるんじゃないの？

千葉 最終回の冒頭でこの場面やっちゃって、残りのページ、エピソード？

馬場・千葉 ……長くね？

千葉 エピソード、長くね？

安孫子 確かに、後日談が長い物語ほど冗長になりがちだ。その後の話は、説明するのではなく、想像させるように、

千葉 (遮る) だから違うんだよな

安孫子 話してる途中だぞ、君

馬場 まあまあ

千葉 うん、やっぱりそうだよ。こっちじゃないんだ

馬場 お、どした？

千葉 ここで竜馬は暗殺されずに、生き延びるんだ

馬場 お、歴史曲げるねえ

安孫子 いや、歴史というものはいつの時代も、権力を握った者の思い通りに曲げら、

千葉 (遮る) そしてその後、

安孫子 おいつ

千葉 どのように身を隠し、名を明かさず影に徹して、秘かに活躍した様を描けばいいんだよ

馬場 お、どうやら決まりましたな

千葉 いや、でもそうしたら、この影武者はここで死ぬ……と、ん？ え、どうやって？ どうやってこの状況で身代わりになるんだ？ ……サラッと？

馬場 サラッと

千葉 え、サラツと？（怒）

馬場 いや、あたしは知らないよ

千葉 そこはちよつと凝っていききたいところだよ？

馬場 なんかすみません

千葉 クライマックスなんだから。痛快、かつ知的で感傷を誘うようなさあ……。ええ、難しくねえ？

安孫子 自分で基準を上げたな

馬場 安孫子さん、そういうのは「ハードルを上げた」って言うのよ

千葉 あれ、難しくなったぞ。ん〜……

安孫子 ハードル？ ああ、ハードルか……。なぜ、ハードルなんだ？

馬場 なんてって、ハードルって上げ下げして、上げると跳ぶの大変でしょ？

安孫子 うん、だったら走り高跳びのバーも同じだろう

馬場 同じけど……同じねえ

安孫子 バーの方が、まさに超えるという感覚が直接的だと思うが

馬場 そうね。「バーを上げたな」……そうね、意味はわからないけど、そうね

安孫子 いや、違うな

馬場 違うの？

安孫子 ハードルでいいんだ。跳んだそばから次から次へと現れる超えるべき障害、その連続。きつとこの表現は、まさに人間の一生を表わしているんだ

馬場 え、そうなの？

安孫子 ああ、深い。「ハードルを上げる」……いいねえ。これで一本書けるんじゃないかな

馬場 ええ、すごい！

安孫子 （書き始める）タイトル、『走り高跳び』

馬場 あれ？

千葉 ああ、ダメだダメだダメだ！ も〜ダメだ〜。ダメだ、こりや〜

千葉、ヤケになって手元の書類をばらまき、

長机に無造作に置かれていた紙幣をポケットに突っ込み、

下手脇通路へ去って行く。

馬場 あらら〜、進まないねえ

安孫子 決断をしないからだ。書き手の決断がなければ、登場人物だって動き出せない。そういうものだ

馬場 そうかなあ。女は決断なんかしないで、いつまでも悩んでいたいものよ

安孫子 知らん

馬場 (自分の世界へ) 世間知らずな貴族の御曹司か、心優しきパン屋の青年、さあどつち

安孫子 なんだ、それは

馬場 ああ……、どつちも好き！と、悩んでいるあたしが好き……これが女よ

安孫子 はっ

馬場 ツルツルプリンス、オア、ソフトフランスパン……Oh, I'm just a woman

安孫子 くだらん

馬場 くだらないものも世の中には必要なの〜。……どれどれ

馬場、先ほどまで千葉がいた机のエリアに寄り、

机の上や床に散乱した原稿を読み始める。

安孫子 ……馬場くん、感心しないね。人の書きかけ原稿を盗み見るのは

馬場 だって、気になるんだもの

安孫子 理由になってない

馬場 わ、全然書けてない

安孫子 馬場くん

馬場 最初の場面描写だけよ

安孫子 馬場くん

馬場 構想メモはちゃんと書けてるのに

安孫子 どれどれ(結局加わって読み始める)

馬場 あ、全六話なのね

安孫子 このメモ、随分きっちり整理して書いてるなあ

馬場 ねえ、なのになんであんなに書けないんだろ

安孫子 一話一話きっちり計算しているだろうに、何を最後の最後で……

馬場 ひよつとして、恋？

安孫子 (無視して読む)

馬場 登場人物ではなく、彼自身がまさに今、悩める恋の真ただ中にいて、

安孫子 馬場くん

馬場 ラブ？(返事)

安孫子 二つ気づいたことがある

馬場 ほお

安孫子 まず、この構想メモ、読める限りで判断するに、最終話だけないよ
うだ

馬場 最終話だけ？

安孫子 そして、彼の書いていた原稿を見たところ、この構想メモを書いた
人間と、筆跡が違う

馬場 え？

”(ノック音) “

安孫子 ん？

馬場 ルームサービス？

安孫子 頼んでないだろ

馬場 ルーム、セルフサービス？

安孫子 なんだそれは？

馬場 さあ？

”(ノック音・強め) “

安孫子 怒っているな

馬場 いいえ、愛情ゆえの強めのノック、あたしはそう感じるわ

安孫子 愛情ゆえの、強めのノック……

馬場 (自分の世界へ) そう、私はあなたの心のドアを開けることなんてで
きない。ああ、できない。私にできること、それはノックだけ

”(ノック音) “

馬場 気づいてほしい、私のささやかな勇気を振り絞った行動を。トントン。
このドアを開けてほしい。トントン。本当は開かないことを知っている
私。トントン。でも、開かないからといって、私の内に秘められたあな
たへの思いは、

“ガチャ”

安孫子 開いたぞ

馬場 開いたわね

安孫子 あいつ、鍵は？

馬場 鍵？あ、ここにある

安孫子 不用心な

堂本（声） 千葉さん？

下手奥通路より、堂本文香が入って来る。

堂本 千葉さ……ああ……

堂本と安孫子・馬場、向き合う。

堂本 トイレ……？

堂本、下手奥通路へ去って行く。

安孫子 あいつ、千葉って言うんだな

馬場 千葉ちゃんかあ

堂本、下手奥通路より帰って来る。

堂本 ……逃げやがったか？

馬場 え、逃げたの？

安孫子 さあ

堂本、千葉が座っていたイスへ手を伸ばし、座面を触る。
近くにいた馬場がよける。

馬場 おととつと

堂本 ……まだ、ぬくい。そう遠くへは行っていないはず

馬場 え、この人、デカ？

安孫子 いや、赤穂浪士だ

” (電話着信音) ”

堂本 あ…… (出る) はい、もしもし……いえ、まだ書けてません。という
か、……あ

堂本、机の上に千葉の財布と携帯電話を見つけ、拾い上げる。

堂本 いや、何でもありません。大丈夫です、逃げてません。……はい、それはわかってますが、ただ、彼ももう限界かもしれない、と……いや、です。このやつてカンヅメにしてはいるんですが……、あ、あと専門家の先生をお呼びして、いろんな角度から検討してみようかと思っただけ……大丈夫です。そこから情報が漏れることはまずないですから……ええ、それは確かに

” ガチャ ”

堂本 あ……すみません。では、のちほど、またご連絡します

馬場 お、千葉ちゃん

千葉、下手奥通路から現れる。何かウケている。
手にはコンビニ袋。

堂本 千葉さん、どこ行ってたんですか？

千葉 いや、ちょっとコンビニ (笑)

堂本 (袋の中を見て) ……ジャッキー・カルパス。こんなわざわざ買
に行くものじゃ……まさか、一杯やろうとしてます？

千葉 違う違う、そんなんじゃないの。いや、本当はさ、フライドチキンが
よかったんだけど、今ちようど揚げている最中で……フッフ (笑)

安孫子 頭おかしくなったか？

馬場 きつと……恋

千葉、ポケットから小銭を出し、長机に置き、
ジャッキー・カルパスも長机に置く。

堂本 あの、何笑ってますか？

千葉 だって、え、ロビー通ってきたでしょ？ 見なかった？

堂本 何をですか？

千葉 あ、見えなかったんだ！ それもウケる (笑)

堂本 ……何の話ですか？

千葉 いやね、ロビーのソファにおじいさんが座ってたんだけど、……ソフ
アの柄とスーツの柄が、全く一緒なの。がははは (笑) 「擬態する
老人」 (笑・自分でウケる)

堂本 ……え、そんな人いました？

千葉 (笑) 見えなかったんだあ、擬態成功！

堂本 原稿は？

千葉 まだです……

安孫子、馬場、ジャッキー・カルパスを眺める。

堂本 (ため息) 外出するにしても、鍵くらいかけてください。不用心にも
ほどがある

千葉 あい

堂本 それから、携帯も持ってて下さいよ。連絡取れないと困りますから

千葉 あい

堂本 逃げたかと思いました

千葉 逃げていいの？

堂本 いいワケないでしょ

千葉 だよねえ

堂本 書けませんか

千葉 書けないねえ。メモも隅から隅まで見たけど、ないしねえ（床のメモを拾い集める）

堂本 そうですか……（一緒に拾い集める）

安孫子 お、メモの話だな

馬場 この娘が書いたの？

安孫子 いや、違うだろう。あの字はだいぶ老け込んでいた

馬場 字って老けるの？

安孫子 （間髪入れず）もちろんだ

堂本 ここまで書いてきた勢いで書けないもんですかね？

千葉 勢い……、勢いはさあ、もうとつくにないじゃん。わかってるでしょ

堂本 ……まあ

千葉 何とかここまで持ってきたけど、って感じだもの

堂本 頑張りましょうよ。あともう一回じゃないですか

千葉 そうだけどさあ、最後だから、クライマックスだからこそ、ビシッと決めなきゃいけないワケで、

堂本 いや、もうここはクライマックスを特別意識しないで、ゆるゆる〜と終わらせてみるのも

千葉・安孫子・馬場 ダメダメ、ダメだよ、ダメダメ、それは（など、口々にセリフを言い、堂本を囲む）

堂本 ……ダメですか？

千葉 ダメだよ、最後なもの

堂本 ……なんだろ、何か圧迫感が

千葉 え、何の話？

安孫子 何の話だ？

馬場 何の話よ？

堂本 ……いえ、何でもないです。……寒い

千葉 ゴーストの限界

堂本 え

千葉 ……結局は本人じゃないんだから、作品を仕上げることはできないん

だよ。もうね、限界

安孫子 馬場くん（千葉を凝視）

馬場 （堂本を見ている）Cカップ（指差し）

安孫子 馬場くん……

馬場 ん、なに？

安孫子 今、何て言った？（千葉を凝視）

馬場 え……「Cカップ」？

安孫子 そうじゃない。彼だ、彼

馬場 千葉ちゃん？……Aカップ？

安孫子 違うっ。彼、今「ゴースト」と言ったか？

馬場 うん、「ゴーストの限界」って言ったわね

安孫子 どういう意味だ？

馬場 ……ゴーストライターかな

安孫子 ライターの話はいい。「ゴースト」は「幽霊」だったな

馬場 ええ、「ゴースト」はまあ

安孫子 彼も幽霊なのか？

馬場 安孫子さん？

堂本 竜馬は……どう、なるんでしょうねえ……？

千葉 ……ん、それねえ、考えたんだけどさあ

堂本 はい

安孫子 え、彼、幽霊？

千葉 すぐ暗殺されて、すぐエピログじゃ持ちやしないんだよね

馬場 いや、違うの、ゴーストライター

安孫子 だからライターの話は今はいいつ

堂本 それはそうですね

馬場 違うの

安孫子 何がだっ

馬場 ああ、もうっ。お互い会話のジャマ！こっち！

馬場、安孫子を連れて下手奥通路へ去る。

千葉 だからさあ、竜馬は生き延びて、陰で日本を支えた存在にしようと思

うんだよ

堂本 おお、いいじゃないですか

千葉 でもね、どう支えたのか、さっぱり見当がつかない

堂本 あ……はい

千葉 そもそも、暗殺からどう逃れるかも思い浮かばないんだよね

堂本 うーん、そこは影武者の竜田を身代わりにして

千葉 そうなんだけど、前回、近江屋にいない竜田と竜馬を入れ替えるタイ

ミングないでしょ

堂本 ああ、なるほど……。実は、いた。というのは？

千葉 実は、いた……ねえ、何か理由やらトリックやらないと、引っ掛かっ

ちやうよねえ

堂本 ですねえ

堂本、冷蔵庫近辺にお茶を淹れに行く。

安孫子、馬場、下手奥通路から戻って来る。

安孫子 だったら、ウライターと言えればいいだろうっ

馬場 ウライター？

安孫子 発音だ、発音。君の曖昧な発音に、僕あ赤っ恥だっ

馬場 発音じゃなくて、安孫子さんが古いだけでしょ……

安孫子 んあっ？

馬場 んーん（「なんでもない」の意）

千葉 あれ、ところで堂本、何しに来たの？

堂本 あ

千葉 直接催促したところで、上がらないモノは上がらないよ

堂本 いや、そうじゃないんです。ほら、エピソードのために、時代考証し

たいって、千葉さん言ってたじゃないですか

千葉 ああ、確か、そんな話も

堂本 それで、歴史研究の先生をお呼びしたんですよ

千葉 え、あれ？ それ、大丈夫？

堂本 何がです？

千葉 だって、ほら、ゴースト

堂本 はいはい、それなんですけど、先生はご高齢で細かいことは気にしないというか、わからないというか、新しい記憶が入りにくいというか……

千葉 ボケてるのね

堂本 いや、でも歴史に関しては間違いないですから

千葉 ふ〜ん、まあ、いいならいいけど。……え、今「お呼びした」って言った？

堂本 はい

千葉 え、どこに？

堂本 ここに

千葉 ここに？ え、いつ？

堂本 今夜です

千葉 ここここ、今夜？ 今じゃん

堂本 ええ、もう向かってると思います

千葉 ちよ、ちよ、急だよ、それ〜。電話くらいしろよ〜

堂本 しましたよ（淹れたお茶を自分で飲む）

千葉 聞いてねえよお

堂本 出てくれなかったじゃないですか

千葉 え、あ、それは……催促の電話かと思って、

堂本 大丈夫ですって。ここは我が社が代々お世話になってる隠れ家的旅館ですから、秘密は一切漏れません

千葉 そうじゃなくて、気持ちの準備ってヤツがさあ

安孫子 「隠れ家的旅館」か。それで経営していけるのか？

馬場 世を忍びたい男と女は、いつの時代もあるものよ

千葉 第一、時代考証も何も、話が進んでないんだから何聞いていいか

堂本 竜馬暗殺の背景を聞いたら、いいじゃないですか

千葉 あ

堂本 それで竜馬が逃れる方法、竜田が身代わりになる方法を考えたらいいんですよ

千葉 お……うんうん、それだ。よし、そうしよう

馬場 あら、なんか解決しそうよ

安孫子 いや、問題を一旦保留にして、楽になっただけだ。何の解決もして

いない。日本人のお得意とする先おく、
千葉 (遮る) で、いつ来るの？
堂本 ええ、もう来ていてもいい頃なんです……
千葉 誰か迎えに行ってるの？
堂本 いえ、先生が自分ひとりで行くと譲らなかつたので
千葉 頑固なんだ
堂本 年寄り扱いされたくないよう
安孫子 年寄りだろうにな
馬場 自分の年齢を受け入れてくれないと、周りが迷惑よね
千葉 でもさ、まだ来てないってことは、迷子の可能性も……
堂本 それは困ります
千葉 部屋番号、間違えてるのかなあ
堂本 え？
千葉 ん、ウソウソ。いや、頑固なボケ老人が勘違いで、全然別の部屋に居座るっていうのは、なかなか面白いシチュエーションかなあ、と思って
安孫子 くだらん
馬場 そう？ 勘違いからの恋、いいじゃない
堂本 あ……、部屋番号教えてないや
千葉 え？
堂本 旅館の住所と名前しか伝えてないんです
千葉 だとすると……、旅館の前で待ってるしかないね。ご苦労様です
堂本 いや、旅館の前はちよつと……
馬場 密会用の宿の前で待つのは、確かにハードル高いわね
安孫子 ハードル？
馬場 うん、ハードル
安孫子 ハードル、なぜに……
馬場 あ、いい、いい。それもうやった、走り高跳び
千葉 じゃあさ、ロビーで待ってたらいいじゃん。その人だつて、とりあえず中には入ってくるんだろうし
堂本 あ……。千葉さん、さっきロビーでご老人見かけた、つて言ってますよ
千葉 たよね？
うん、見た。ソファに擬態する老人、見逃しかけたけど見た

堂本 え、ちよ、ちよっと待って下さい。そのご老人、ひよっとして、白髪で眼鏡をかけてて時計をしてました？

千葉 うん……、確か。え、それで特定できる？

堂本 やっぱりかあ

千葉 おじいさんって、大体そんな感じじゃない？

堂本 ちよっと行ってきます

千葉 あ、うん

堂本 見つけられるかなあ

堂本、下手奥通路へ去って行く。

千葉 大丈夫。目を凝らすと、輪郭が見えて来るから（声だけ堂本を追って）

安孫子 そんな見事な擬態なのか

馬場 あたしも見たいなあ

千葉、買ってきたジャツキー・カルパスを食べ始める。

安孫子 ……ゴーストライターか。いるんだな、そういう人間が

馬場 そうね、あたしも生で見るの初めて

安孫子 本物は何をしているんだ？

馬場 この子たちがアテにしているところを見ると、逃げちゃったんじゃない？

安孫子 なるほど、逐電か……

馬場 きつと駆け落ちよ。北へ？ 南へ？ いいえ、日本海（自分の世界へ）

安孫子 （千葉の書類を覗く）時代劇か……。竜馬に影武者。まあ、ありが

ちと言え、ありがちな

馬場 そう、日本海は今日も曇り

安孫子 こういう表面的な設定にとらわれている限り、薄っぺらなものしか書けないだろうな

馬場 日本海に砂浜はありません、全部崖

安孫子 そもそも現代人にウケようとして、時代劇に現代の道德観や価値観を当てはめるのが、愚の骨頂なのだ

馬場 日本海に魚はいません。貝8割、イカ2割

安孫子 ええい、聞いたるのか！

馬場 聞いてないわよっ

安孫子 僕の声が聞こえるのは、君しかないんだぞ！

馬場 仲良くしようじゃないのさ！

安孫子 うん、仲良くしよう

馬場 そうね、仲良くしましょう。……それで、彼はどんな話を書いてるって？

安孫子 僕に聞かれても困るが、先ほど構想メモを拾い読みした限りだと、

幕末の英雄・坂本竜馬にハワイアンの影武者がいたという設定らしい

馬場 なぜにハワイアン……？

安孫子 竜馬が長崎にいた時期に、バッタリ会った瓜二つのハワイアンらしい

馬場 ……え、そんないい加減な設定なのに、最終回のデイテイルでこんなに悩んでるの？

安孫子 そのようだな。大抵この手の歴史ものは終わり方を前もって考えておくものだが、そのメモは見当たらなかったな

馬場 いい加減ねえ

安孫子 もしくは、このメモを書いた、彼じゃない誰かが意図したものか

馬場 誰か、って本物さん？

安孫子 さあ、それは知らないが

馬場 それで、恋は？ 色恋沙汰はあるの？

安孫子 どうやら、あるらしい

馬場 うひょー、ロマンズ！

安孫子 竜馬とその妻・おりょう、そして影武者のハワイアン、この三人が三角関係になるらしい

馬場 ええー、本当お？ やるなあ、ハワイアン

安孫子 ああ、やりたい放題だ。今さら最終回で悩む気が知れない

馬場 最後は三人でハワイに行くってのはどう？

安孫子 どう？ って言われてもな。僕は知らない

馬場 三人でハワイへ駆け落ち、……斬新っ

安孫子 馬場くん、駆け落ちは三人でもできるのかい？

馬場 ん？

“ガチャ”

堂本（声） こちらです、どうぞ

堂本、下手奥通路より現れる。

千葉 え、遅くない？

堂本 すみません、なかなか見つからなくて

千葉 あ、ロビーからいなくなってた？

堂本 いえ、擬態が見事過ぎて

千葉 （笑）な？ 見えないんだよ、角度によっちゃ

堂本 （奥へ）先生、どうぞ、こちらに

千葉、ジャッキー・カルパスを長机の引き出しに入れる。

江沢孔源、下手奥通路より入って来る。

堂本 では、ご紹介します。こちらは歴史研究家の江沢孔源先生です

江沢 ……ジャッキー・カルパス（ニオイを探っている）

堂本 ……ええと、江沢先生は日本の近現代史をご専門とされています

江沢 ジャッキー……

千葉 あ、初めまして……、千葉真と申します

堂本 先生、こちらの千葉さんは雑誌のライターさんで、今日は幕末関連の
記事のために、先生にお窥いしたいことがあるそうです

千葉 ん？

堂本 （小声）今日はそういうこととしておいて下さい

千葉 あ、ああ、なるほど

江沢、長机の引き出しにあるジャッキー・カルパスを発見する。

江沢 ……君かつ！

千葉 ……はい、僕なのですが

江沢、千葉を睨みつけたまま、ゆつくりジャッキー・カルパスの袋を開け、ゆつくり包装紙をはがし、ゆつくり食べ始める。

堂本 じゃ、私はこれで

千葉 待て待て待て

堂本 まだ大分仕事残ってるんで

千葉 問題を増やして帰るなっ

江沢 いただきますっ！（食べながら）

堂本 ……大丈夫です（千葉に）

千葉 何がだっ

堂本 きつと書けますっつて

千葉 それ以前の問題が生まれたよ

堂本 また顔出しますんで（帰る準備をする）

千葉 何時に？

堂本 いや、また明日にでも。大丈夫ですよ、締め切りまで、あと二日もあります

千葉 おい、じゃあ、この……

堂本 ははは、大丈夫大丈夫、大丈夫！

堂本、言いながら下手奥通路へ去る。

千葉 おい……

江沢 君

千葉 え、はい

江沢 あげよう（ジャッキー・カルパスを二つ差し出す） 食べなさい

千葉 え……（受け取る） ありがとうございます……

馬場 安孫子さん

安孫子 ん？

馬場 だいぶこちら側の人が来ましたね

安孫子 ふむ、ただ、身体はしっかりしてるし、まだまだこっちは来ない

だろう

江沢 (食べ続けている)

安孫子 食欲も旺盛だ

馬場 ええ。何にしても、うらやましいわねえ

安孫子 こればかりはそうだねえ

千葉 あの、江沢……先生？

江沢 江沢孔源っつ！

千葉 ……はい、あの、今日はこんなに遅くにご足労いただき、ありがとうございます

江沢 ありがとうございますっ

千葉 ……今日はですね、先生にちよっとお聞きしたいことがありまして、お越しいただいたんですが、時間も時間ですし、早速ご質問してもよろしいでしょうか？

江沢 君は誰だ？

千葉 え、はい、千葉と言います。一応、物書きの端くれです

江沢 そうか、私の名前を知りたいか？

千葉 いえ、それはお窺いしております。江沢孔源せ、

江沢 そう、江沢孔源っつ！

千葉 はい……

安孫子 おい、話が全く進んでないぞ

馬場 千葉ちゃん、世界で一番、この一分をムダにしたわね

千葉 ……えっと、先生にお聞きしたいのはですね、慶応三年の近江屋で坂本竜馬が暗さ、

江沢 (遮る) 坂本竜馬！ いたねえ、坂本竜馬！

千葉 はい

江沢 彼、今いくつになる？

千葉 今？

江沢 もう、いい年だろう

千葉 いや、あの、坂本竜馬は慶応三年に殺されてまして、一応、当時三三才でした

江沢 そうか、三三才か。……三三才と言えば、坂本竜馬が暗殺された年と同じだなっ

千葉 はい……えっと、

江沢 慶応三年、近江屋での出来事だ。当時、竜馬は大政奉還を成し遂げた直後で、同郷人の中岡慎太郎と会っておった

千葉 そ、そうです！で、それでいくつかお聞きしたいことがありますて、時に君

江沢 え？

千葉 君は坂本竜馬は、大政奉還により幕府を救おうと考えていた、などは考えてはいまいか？

千葉 それは……、そうなんじゃないですか？

江沢 少し待て

千葉 はい……

江沢、ゆつくりと自分の持ってきたバッグのところへ行き、ゆつくり中を探る。そして、ゆつくり大きめのビンを取り出す。

ビンの中には柿ピーがギッシリ入っている。

その柿ピーをゆつくりひと掴み、机の上に広げて、

慎重にピーナッツだけを選んで拾い出し、二、三粒食べる。

そして、広げた柿ピーをゆつくりビンの中に戻し、

ビンをゆつくりバッグに戻し、元の位置に戻って来て……

江沢 坂本竜馬は幕府を倒そうともしていた

千葉 何だったんだ、今のはっ！

馬場 マイ柿ピーね

安孫子 ああ、シリカゲルが入っていた

千葉 え、ちよつと待ってください。「幕府を倒そうともしていた」って、竜馬は幕府も倒幕派も、どちらも助けようとした英雄じゃないんですか？

江沢 ……………

安孫子 時代によつては、大量殺戮した者が英雄なんだがな

馬場 違うわよ。英雄は、ヒロインがピンチの時に助けてくれる、やたら夕イミングのいいやつのことよ

千葉 いや、確かに薩長同盟で、幕府に対抗できる勢力をつくる手助けもしましたが、それは幕府と交渉を進めるためのものだったし、

江沢 ……………

千葉 幕府を助けようとしたことで殺されたという説だって、有力なものとして残ってますし、

安孫子 あれ、この御仁（江沢を見て）

馬場 え？

千葉 ……先生？

江沢 ……えっ？

千葉 ……………（脱力）

安孫子 寝てたな

馬場 そうね、もう老人は寝る時間だわね

千葉 先生、先ほどのお話ですが、

江沢 坂本竜馬の目的はひとつ、新しい日本をつくることにあった

千葉 あ、はい

江沢 そのためなら、徳川家があるうがなかるうが、どちらでもよかった
千葉 どちらでも？

江沢 坂本竜馬は曲がらぬ信念を持つ誇り高き武士ではなく、結果的に負けない道を選ぶ「商人」だったと言うべきだろう

千葉 商人、ですか

江沢 実際に彼は、幕府を助けようとする傍ら、せっせと鉄砲を土佐に運んで、戦の準備もしていた。これぞ、どっちに転んでも損をしない、優れた商人の成せるワザである

千葉 そう、なんですか

江沢 戦となれば金もかかるし、人も死ぬ。これは損である。損を回避するのが、商人だ。また、戦に乗じてモノを売ろうとするのも、また商人。坂本竜馬は、複雑で多面的な顔を持つ武士だったのだろう。それゆえに魅力的な存在ではあるが、単純明快な英雄などではなかったと、私は声を大にして言いたい……

江沢、しゃべりながらゆっくりとベッドに横になり、

セリフの言い終わりには大分声も小さく、ゆっくりになっていく。

馬場 声、小っちゃくなつたわよ

千葉 なるほど、それは掴み切れてませんでした。あの、その上で、暗殺された時の状況をお聞きしたいんですが（言いながら江沢に近づいて）、……寝てるなあ

安孫子 横にしてはいけなかったな

千葉 先生、先生……ああ、深い

馬場 これは無理ね

千葉 （江沢の鼻・口の前に手を当てる）

馬場 あ、息確認した

千葉 （ため息）……あ、結局必要なこと、何も聞けてない。……何やってんだか

千葉、机に向かい、原稿用紙と向き合う。

安孫子 まあ、今さら倒幕論者として描くワケにもいかないだろうな

馬場 ねえ、安孫子さん、さつきから気になってんだけど

安孫子 何だい？

馬場 倒幕とか大政奉還って、何？

安孫子 何、とは？

馬場 いや、そういうの全然わからないんだけど、何？

安孫子 おいおい、馬場くん。君、そんなことも知らんのか

馬場 知らないわよ。だって、そんなの男の知識でしょ

安孫子 男女の違いは関係ないだろ

馬場 じゃあ、安孫子さん、パッチワークの「ペーパーライナー法」ってわかる？
………

馬場 ほら、わからないじゃない

安孫子 ペーパーライナー法は、出来上がり寸法の型紙を布でくるんで、ひとつひとつのピースを形作り、その状態のピース同士を巻きかがりでつなぐ方法のことを言う

馬場 何で知ってるの！

安孫子 作家たるもの、無駄な知識などない

馬場 ああ、おみそれしました。おみそれ〜

安孫子 倒幕と大政奉還だったな。簡潔に言うのだ、徳川幕府が日本を統治

していた江戸時代の末期、いわゆる幕末の頃の話だ。それまで公には交易を持たなかった諸外国からの圧力が高まり、徳川幕府はその対応能力の低さもあって、圧倒的な武力を背景とする諸外国に、

馬場 あ、……あ、安孫子さんも、もう大丈夫、もう限界

安孫子 何がだ

馬場 あたしこれ以上、「男知識」聞いてたら、ヒゲが生えてきそう

安孫子 何をバカなことを。続けるぞ

馬場 ダメ。のどにくるぶしできちやう

安孫子 くるぶし……？（自分ののどを触ってみる）おお

馬場 もう無理。性別の限界

安孫子 極端な。思い込みに過ぎん

馬場 いや、だって、

安孫子 お？

千葉、おもむろに立ち上がり、部屋に一人きりだと思いつき込み、なんか恥ずかしい踊りを始める。次第に鼻唄も混じる。

馬場 （笑）千葉ちゃん、壊れちゃったー！

安孫子 まったく、密室だと思ってるからに

馬場 （千葉の横で、一緒に踊る）

安孫子 やめなさい、馬場くん

馬場 （踊りながら）あはは、これちょっと愉快。ほら、安孫子さんもご一

緒に

安孫子 やるわけないだろう。これでも僕は昔、「盆踊りの貴公子」と町内で呼ばれた男だ。誇り高き踊り手がそうやすやすと……（一緒に並んで踊り始める）

しばらく、三人で踊る。

千葉 あーっ、もう無理っ。もう、もおお、どうすんだよお

千葉、再び机の上の小銭を拾って、下手奥通路へ出て行く。

馬場 あらら、また

安孫子 気分を変えても書けないものは書けない。逃げずに机に向かうしかないだろうに。軟弱者めが

馬場 またそんな厳しいこと言って

安孫子 そんなことはない。頭で書けないなら、ここ(胸)で書くしかないだろう

馬場 わかってるくせに

安孫子 何がだ

馬場 どうやっても、書けなかったことあったでしょ？

安孫子 ……………

馬場 私たちが一番よくわかってるじゃない

安孫子 だが、この手の話なら、いくらでも……

馬場 だったら安孫子さん、書いてあげたら？

安孫子 え？

馬場 書けるでしょ、今なら。こっそり

安孫子 お、……本当だ

馬場 さ、どうぞ、先生

安孫子 いや、待ちたまえ。しかし、だ。彼が帰ってきて、話が進んでたら不審に思うだろうに

馬場 気づきませんで。思いも寄らないわよ、私たちがいることなんて

安孫子 それはそうだが……。そうだな、書くか

馬場 書きましょう

安孫子 うん、まずは構想からだ。えっと(原稿を見る)、ああ、暗殺の逃れ方か

馬場 リアリティを大事にね

安孫子 本当に大事にするなら、あっさり殺されるべきだが……。ふうむ、逃れ方……。そもそもだ、命を狙われる人間が、のうのうと酒を飲んで

ると思うかね

馬場 思うかね(オウム返し)

安孫子 これは何か奥の手があったと考えてしかるべきだ

馬場 よっ（合いの手）

安孫子 しかし、それが機能せず、殺されてしまった。つまり、機能してい
たら、助かっていたと考えればいい

馬場 はっ（合いの手）

安孫子 定番で考えれば……、抜け穴だな

馬場 抜け穴？……それはつまり、抜け穴ですか？

安孫子 襲われてもいいように、逃げ道を壁や床につくっていた。……ふっ、
忠臣蔵の世界だな

馬場 ええ、そうねそうね、ちゅうしん☆△ね（わからない）

安孫子 京都見廻組が来た時に、脱出を図る……。おお、なかなかいい展開
じゃないか

馬場 え、書けそう？ 続き書けそう？

安孫子 ああ、彼が帰って来る前に、彼の筆跡っぽくメモ書きを残しておく
としよう

馬場 おお、じゃあ早速

安孫子・馬場 ……あ

下手奥通路より、千葉が入って来る。

安孫子 遅かったか

馬場 もう、安孫子さんがグズグズ余計な知識をデカイ顔でひけらかしてい
るから

安孫子 言ってくれるじゃないか、馬場くん

千葉 え？

馬場 ……ん？

千葉 誰？

安孫子 おや？

千葉 あ、すみません。部屋を間違え……（机の書類やベッドの江沢を見る）
てはいない……

安孫子 馬場くん、これは……

馬場 ええ。（千葉に）ねえ、見えるの？ あたしたちが

千葉 ……はあ？ ちよ……つと、あ、あなたたち！ 人の部屋で何してん

だ！

馬場 何って……、やっぱり見えてるわよね

千葉 ど、どこから入ってきた！

馬場 どこから、だろう？（安孫子に）

安孫子 ああ、そう言われるとなあ

千葉 あ、……鍵（手前長机の上の鍵を確認）

安孫子 ああ、君は不用心極まりない

馬場 千葉ちゃん、不用心

千葉 ん、……ん？なぜ僕の名前を知ってるんだ

馬場 なぜって

千葉 あ、僕の荷物を物色したな？

安孫子 ほう、そうなるか

千葉 なんだ、なにが目的だ。け、警察呼ぶぞ

安孫子 ひどく興奮。そして混乱しているな（馬場に）

馬場 そうね、でもあたし嬉しい。まさか千葉ちゃんとお話できるなんて思

わなかった！

千葉 何なんだよ、一体……。ちよつと、ケータイ……

千葉、手前長机の携帯電話に近づこうとするが、

二人を警戒して近づけない。

馬場 ん？ケータイ？これ？なに、電話するの？

安孫子 それは、きっと今の君には無理だな。そもそも、このスマウトフォ

ウン（発音変）にも触れまい

千葉 はあ？……アタマおかしいんじゃないか？

千葉、ベッド脇にある備え付けの電話を取ろうとする。が、取れない。

千葉 （取れない）ん？（取れない）あれ？え、これ、どうなってんだ？

安孫子 ゴーストは基本的に、モノには触れない

千葉 え？

馬場 声も届かない。だから、電話なんてできやしないのよ

千葉 なぜ、僕がゴーストだと知ってる？

安孫子 ん？

千葉 堂本の知り合い？ あ、出版社関係の方？

安孫子 ああ、なるほど。ゴーストとゴーストウライターの勘違いか。浅はかな

馬場 千葉ちゃん、そういうのね、めんどくさいっ。却下

千葉 あ、え？ 今、僕は何を却下されたんだ？

馬場 そんなことより、千葉ちゃん、死んでない？

千葉 え？ な、なんて？

馬場 あたし達が見えて、話も出来ているとなると、千葉ちゃん、多分死んでるんだと思うんだけど

千葉 ……………

安孫子 固まったな

馬場 ねえ、安孫子さん。これ、どうやって説明したらいいんだろ？

安孫子 ふむ、何事も人に言われたところで、納得できないものだ。自分で気づかなくてはいけないだろう

馬場 そうねえ

安孫子 さあ、千葉くん。君の記憶を辿ろうじゃないか

千葉 ……………

安孫子 じゃあ、君がこうやって踊ったところから辿ってみよう（ちよっと踊る）

千葉 ……え、ちよ、ちよっと、なんで知ってんですか、それ

馬場 ああ、はいはい、恥ずかしい恥ずかしい。いいからいいから

千葉 いや、よくないですよ。え、一体どこからのぞいてたんですか？

馬場 ああ、違う違う。地縛霊地縛霊。さ、安孫子さん、続きをどうぞ

千葉 地縛霊…………？

安孫子 それで先ほど君がこうやって踊ってる時にだ（ちよっと踊る）

千葉 それはもういいですから（止める）

安孫子 「もう無理っ」と言って、部屋を飛び出したな。あれはどこへ行ったんだ？

千葉 ……コンビニに

馬場 さつきも行ったじゃない、好きねえ

千葉 え、そんな前から？

馬場 ううん、最初から。地縛霊だもん

安孫子 我々からすれば、君が侵入者だ

千葉 ……ええ

安孫子 構わんよ。それで、ジャッキー・カルパスに飽き足らず、何を買いに行った

千葉 はい、フライドチキンを……

馬場 肉に次ぐ肉ね

千葉 いや、さきほどもフライドチキンを買いに行ったんですが、なかったの

安孫子 肉を食う前に台本を上げなきゃならんだろうにっ

千葉 すみません。……いろいろご存知のようで。でも、台本を書くためと
いうか、何というか

馬場 え、どういうこと？

千葉 肉を食べると血の巡りが良くなって、頭の回転もよくなる気がして

安孫子 思い込みだな。作家たるもの、書けるまで何も食うな

馬場 大事よ、思い込み。あたしも書けない時にはよく四ツ葉のクローバー
食べたもの。おまじないみたいなのよね

千葉 はい……。あの、書けない時、と言うのは……？

馬場 あたし達も物書きなの、ほら

馬場、長机の端に積まれた原稿用紙の山を指差す。

千葉 うわ、これ……。こんなのがあったっけ……？

安孫子 それで、肉を買って、その後は？

千葉 あ、はい。それで……。いや、というかその前に、コンビニに行く途
中で……

“ピーポーピーポー”

外から、救急車が近づく音がする。

馬場 ……え、これ、千葉ちゃん？

千葉 バイクが急に……

安孫子 ああ、なるほど。……ん？（千葉を見て）

千葉 あの、ちなみになんですが、お二人は、その、もう死んでおられる、ということでしょうか？

馬場 そうね、とつくに。その辺は、早いところ受け入れてくれるかな

千葉 はい、それは、じゃあ、はい。で、なんですが、お二人とこうやってお話できている僕というのは、そうなることやはり……

馬場 ん、死んでると思う

“ピーポーピーポー”

救急車が遠ざかって行く音。

馬場 一応、病院には連れて行くみたいだけど

千葉 ……なるほど（考え込む）

馬場 やっぱりショック？

千葉 え？ いや、あまりにもあつけないんで、逆に戸惑っているというか
馬場 そういふものなのよ。死なれた方は堪らないけど、死んだ方としては、もうすんなり

安孫子 いや、馬場くん、違いかもしれない

馬場 何が？

安孫子 千葉くん……、死んでないかもしれない

千葉 え？

馬場 でも、私たちと話せてるし、見えてるみたいだし

安孫子 よく見てみる、彼の右脚を

馬場 ん……あ、黒い

千葉、右脚だけ黒くなっている。

千葉 え、あれ？

安孫子 彼はまだ、こちらの世界に片足を踏み入れただけかもしれない

千葉 え、じゃあ、僕はまだ……

安孫子 生きている

馬場 安孫子さん、右脚だけ見えなくてことは、片足を踏み入れたんじゃない、かろうじて片足だけがあちらの世界に残ってるんじゃない？

安孫子 細かいな。表現上、そっちの方がしっくり来るだろうが

馬場 ええ、不満

千葉 あの、じゃあ、僕は大丈夫なんですわ

安孫子 まあ、今のところは

馬場 でもね、この状況を考えて、結構危ないってことだと思うけど

千葉 片足だけ、でもんね……

馬場 少しは気楽になった？

千葉 え、何がですか？

馬場 締め切りから解放されて

千葉 あ、そうか。そうなりますか……

馬場 うん、だってもう執筆どころじゃないでしょ

千葉 あ、……考えてなかったです

〃 (携帯電話バイブ音) 〃

手前長机の千葉の携帯電話が震えている。

千葉 …… (画面を見る) あ、堂本

安孫子 先ほどの女性か

千葉 これ、やっぱり出られないですよ

馬場 まあね、触れないから

千葉 ですよ。 (ちよつと「ロック解除」を試みる) あ、無理……

馬場 安孫子さんなんて、触れたところできつと使えないわよ、スマートフ

オン

安孫子 いや、そんなことは、そうかもしれない

馬場 あら、素直

安孫子 事実だ、認めよう。しかし「使えない」のではない、僕は「使われない」のだ。そもそも指先で画面に触れるだけで、あれやこれや瞬く間に思い通りにできるなんて、人として傲慢だとは思わいかね。人は土に触れ、種を植え、時間をかけて失敗を繰り返しながら、作物を育み、やつとの思いで生き長らえてきたのだ。人類の歴史から言えば、そちらの

方がよつぽど自然で、かつ無意識下では現代人もそれを求めていると、私には思えてならない……

（安孫子のセリフの間、小声で馬場と千葉のやり取り）

馬場 これ、何？

千葉 LINEです

馬場 LINE？

千葉 アプリです

馬場 アプリ？

千葉 アプリケーション

馬場 アプリケーション？

千葉 英語です

馬場 英語？

千葉 ……あ！

安孫子 えっ！……ああ、びっくりした

馬場 どうしたの、千葉ちゃん？

千葉 僕、ケータイここにあるし、財布もここだし、もしかすると、身元不明のケガ人になってるかもしれない

馬場 何も持ってなかったの？

千葉 なかった、ですね

安孫子 犯罪歴があれば、指紋で分かるぞ

千葉 それもないですね

馬場 背中に「千葉県」の入れズミが

千葉 ないですね

馬場 じゃあ誰かわからないじゃない

安孫子 君がここにいることを知る人は？

千葉 堂本と、彼女の上司しか……

馬場 家族は

千葉 独り暮らしですから

安孫子 となると、身元が分かるまで、少し時間がかかるな

馬場 でも、それで何か問題ある？

千葉 え……、人に迷惑かけそうな気が……

馬場 死にかけておいて、何を今さら

千葉 あと、この原稿、僕が仕上げないといけないのに、逃げたと思われたら、それなりにパニックになるんじゃないかと

安孫子 いや、それはないだろう

千葉 え？

安孫子 さっき君がいなかった間、堂本女史が電話で話していた。逃亡ぐら
いなら彼女たちにとつて、想定内の事態だ

千葉 あ、……そうですか

馬場 今度こそ、シヨック？

千葉 いや、……なんというか、だったらさっさと逃げておけばよかつたな
あ、と

安孫子 それはウソだろう

千葉 う、ウソ？

馬場 安孫子さん？

安孫子 馬場くん、なぜ彼がここにいるか、考えてみたまえ

馬場 お？

安孫子 (千葉に) いいかい、今君の身体は救急車あるいは病院にある。本
来、君の魂は身体とともにあるべきだし、あるいは想いを遺した誰かの
元へ寄り添ったつていい

馬場 あ、それラブ

安孫子 だがしかし、君の魂は今この部屋にある。この事実つまり、君が
この原稿を書かなくてはならない、もしくは、書きたいと思っているか
らに他ならないのだ

千葉 そうなんですか？

安孫子 知らん。多分そう

馬場 心残りなんじゃない？ 死んでも死に切れないって

千葉 そうなんですか？

馬場 知らないわよ。自分のことでしょ？

千葉 自分のことがよくわからなくて

安孫子 何をいい年して、思春期の少年のようなことを

馬場 そうよ、毛穴開いてるわよ

千葉 ……そうなのか、僕はこの話の続きを書きたいのか

安孫子 書けもしないくせにな

千葉 はい……

” (携帯電話バイブ音) ”
手前長机の千葉の携帯電話が震えている。

千葉 (見る) また、堂本…… (携帯電話を触ろうとするが、触れない)

馬場 さつき、他の仕事がたくさんあるとか言ってたのに、こっちに気が回し過ぎじゃない？

安孫子 何か急用かもしれないぞ

千葉 ……あの

安孫子 うん？

千葉 ちよつと質問なんですけど

安孫子 なんだね

千葉 僕が書きたいと思って魂がここに来たところで、全然触れないんじゃ、結局書けませんよね

安孫子 うん、そうだね

千葉 そうだね、って

馬場 普通ならね

千葉 普通なら……？

安孫子 君はツいてるのかもしれない

千葉 轢かれましたよ

安孫子 ツいてないなあ

馬場 安孫子さん、百聞は一見に如かナントカよ。実際に、ほら、ね

安孫子 うむ、そうするか

安孫子、ベッド脇に行き、しゃがんで姿を消す。

千葉 え、何なんですか？

馬場 まあまあ、見てなさいって。ところで千葉ちゃん

千葉 はい

馬場 堂本さんとは、どういう仲なの？

千葉 どういうって……

馬場 付き合ってるの？

千葉 ……いえ

馬場 なになになにに、今の微妙な間は

千葉 いえいえ、そんなんじゃない。彼女はただの大学の後輩ですよ

馬場 へえ、ただの後輩ねえ

千葉 なんですか？

馬場 ただの先輩に、ゴーストライティングなんてお願いするかなあ、と思つてさ

千葉

ぼ、僕は大学の頃から劇団の脚本を書いていて、堂本もその劇団にいたから、その……、それと、仕事以外で知ってる物書きが僕くらいしかいなかったんじゃないですか。そっちの方が口止めしやすいんだと思いますよ

馬場 そうなのかしら

千葉 そうですよ

馬場 でも千葉ちゃん、独り者でしょ？

千葉 え、……まあ、そうですけど

馬場 堂本さんは？

千葉 今は、独りだと……

馬場 じゃあ、いいじゃあん。芽生えたらいいじゃあん

江沢 (起きる) 馬場くん、僕のことを忘れてやしないだろうねえ

ベッドの上の江沢、上半身を起こして、こつちを見ている。

千葉 江沢先生っ、起きられましたか

江沢 正確に言えば、起きてないがね

千葉 困りますよ、急に寝ないでくださいよお

江沢 馬場くん、このご老人、なかなかメンテナン스가行き届いていて、ジョイントも割合なめらかに動くぞ (肘など曲げ伸ばししてみる)

馬場 へえ、意外。きっと、人に気を遣ってない分、ストレスが少なくって健康なのね

江沢 はっはっは、あり得るな。江沢孔源っ！ いいねいいね、声もよく出るよ。馬場くんも試してみるかね

馬場 やあよ。あたし、おじいさんは無理。自我が崩壊しちゃう
江沢 何を小娘みたいなことを。人間八十超えたら、性別なんて関係ないぞ
馬場 うわ、問題発言っ。千葉ちゃん、ひどくない？
千葉 あの……、え、あれ？（頭をかかえる）
馬場 どうしたの、具合悪いの？
千葉 いえ……あ、まあ、死にかけてますけど
馬場 あ、そうだった（笑）
江沢 馬場くん、ケツサク（笑）
千葉 あの、どうして、江沢先生としゃべれるんですか？（馬場に）
馬場 え、わからないの？
江沢 わからんかね？
千葉 ……えと、えと、どういうことだ
江沢 察しが悪いなあ。今ここに実体のない君や馬場くんとやり取りができ
ているんだ。さあ、導き出される答えはひとつだろ
千葉 ……安孫子さん？
江沢 ……ああ。初めて、名前で呼んでくれたね
千葉 ええ？
江沢 もし疑いがあるなら、先ほどの君の踊りを（踊り始める）
千葉 いいです、やめてください。信じます
江沢 本当かい、本当に信じてくれたかい？
千葉 信じました、踊らないでください
江沢 馬場くん、強引に信じてもらえたようだ
馬場 ええ、そのようで
千葉 これは一体……
馬場 私たちゴーストは、深い睡眠に入っている人になら乗り移れるの
江沢 旅先でぐっすり寝たハズなのに、あまり疲れが取れてなかったことは
ないかい？
千葉 はい
馬場 ？
千葉 自分の記憶よりも、多めにお酒を飲んだ形跡があったことはないか
江沢 はい
千葉 はい
江沢 我々の仕業だ（馬場と合わせてポーズ）

千葉 それはつまり……

江沢 つまり我々は、夜な夜な宿泊者の身体を借りて、普段出来ないことをさせてもらっているワケだ

千葉 許可なく？

馬場 許可なんて取りようがないもん

千葉 あの、これは誰の身体でも入れるんですか？

江沢 うむ、まずは意識を失っていること。そして、我々に限って言えば、この部屋にいること。地縛霊だからね

千葉 はあ

馬場 だからね、千葉ちゃん、ツいてるのよ

千葉 え

馬場 だってこのおじいさんが、たまたまここで眠っていたんですもの

江沢 これで、原稿の続きを書くことができるな、物理的には

千葉 あの、それなら、僕が江沢先生の身体に入った方がいいんじゃないですか？

江沢 それはダメだ

馬場 ええ、それはダメ

千葉 何ですか、新入りイジメですか？

江沢 君はまだ、片足だけ未練たらしく死んでないだろう

千葉 え

馬場 ちゃんと死んでないと乗り移れないの。乗り移るって大変なのよ、全身運動なんだから

江沢 それに君はどちらにせよ、続きが書けないんだろう。こっちはもう、

書きたくてウズウズしているんだ

千葉 書きたくて、って続き思い浮かんでるんですか？

江沢 まあな。しかし、いくつか確認しておきたいことが（書類を見始める）

千葉 ……あの、内容は、ご存知なんですか？

江沢 ああ、のぞき見させてもらったからな。ただ、見えなかった部分がちらほらと……（書類を本格的に読み始める。ジャッキーカルパス等、必

要ないものを床に放っていく）

馬場 安孫子さん、ずっと興味津々だったのよ。時代モノ、好きだから。ちなみにあたしは恋愛モノよ、ラブ

千葉 はあ……、ラブ
馬場 で、で、で、おりょうさん？ は、どうしてハワイアンと恋仲になっちやうの？
千葉 ああ、よくご存知で
馬場 うん、ご存知。なんで？
千葉 えと、竜馬が全国を駆け回っている間、独りであるおりょうの世話をしていたのが竜田、あ、ハワイアンで、それで次第に、という具合なんです……
馬場 いいわね、次第に。そうよ、次第になのよ。そして気がついた時には、心に火がついているの。いいわよね、次第に。次第に——っ！
江沢 馬場くん、うるさい
馬場 (余韻) 次第にいゝ
江沢 千葉くん、大体のことはわかった。そして僕なりに君に提案できることもあるだろう
千葉 本当ですか？
江沢 その前に、君に聞いておきたいことがある。個人的興味ゆえだが
千葉 ……はい
江沢 この作品の本物の作者はどこで何をしている？
馬場 あ、それ私も知りたい
江沢 この構想メモを書いたのは君じゃない。明らかに筆跡が違う。ここま
で綿密に話を作っておいて、それを放っばらかして他人に執筆を任せる
というのは、僕には理解できない。無責任にもほどがある
千葉 藤本先生は、無責任な人なんかじゃありません
江沢 ……藤本、という名か
千葉 書きたくても書けない状況にいるんです
江沢 どういう状況だ、想像もつかん
千葉 ……自宅療養中で、昏睡状態です
江沢 ほう、なるほどな
馬場 病院ではないの？
千葉 できる治療は全て終えて、静かに最後を待たために退院しました
馬場 それは、随分悪いのね
江沢 なぜそんな状態で執筆を引き受けた？ 書けなくなるのはわかってい

ただらう

千葉 ……わかりました。この作品について、始めからご説明します

江沢 時間は限られている、手短に

馬場 あたしの集中力も限られている、手短に

千葉 はい……、そもそもは、先ほどここにいた堂本が務める権藤出版の権藤社長と、かつてドラマのヒット作を連発していた藤本雄三先生が友人だったことが始まりです……

この出版不況の時代に、権藤出版もまた、次々と雑誌が廃刊に追い込まれていました。そして、権藤社長が立ち上げ、大切にしていたシナリオ専門雑誌も、いよいよ廃刊の時機を迎えました

江沢 廃刊か……、世知辛いな

馬場 大丈夫よ、千葉ちゃん。あたし、千葉ちゃんの長い話、まだギリギリ聞いてるから。さっ、続きをどうぞ、短めに

千葉 はい。藤本先生は、その話を聞きつけ、雑誌の廃刊に合わせて、遺作を載せたいと仰ったそうです。権藤社長はその申し入れを受け入れました。権藤社長としても、藤本先生に執筆する最後の場を提供したかったんだと思います。こうして始まった連載でしたが、全六回のうち第二回を終えた時点で、藤本先生の病状が悪化し、執筆ができなくなりました。

しかし、権藤社長のつよい要望で連載は続行し、代筆者、つまりゴーストライターを仕立てるようになりました。そこで白羽の矢が立ったのが、僕です

江沢 お、急に君が出てきたな

千葉 堂本は、僕が藤本先生の大ファンであることを覚えていて、今回の話を持つてきました。藤本先生に似せた文体で、シナリオを書くように、と

江沢 身内の方が口止めしやすい、だったか

千葉 はい。それから、僕が脚本を書いている劇団は、ここ数年休団してて……、プラプラしている僕を見かねてのことかもしれません

江沢 なるほどな……、そういういわれのものか。実にややこしい。それで、これが最終回、ということか

千葉 はい

江沢 それがまだ全然書けていない、と

千葉 はい……

江沢 締切りは？

千葉 印刷所に都合を付けてもらって、何とかあと二日は待ってもらえるようですよ

江沢 二日か……。まあ、書けなくはないか

千葉 はい。……アイディアさえあれば

江沢 頼みのメモも、最終回に関しては……

千葉 何もないんです

江沢 なぜだ？

千葉 わかりません

江沢 何か聞いてないのか？

千葉 いえ、何も。それに、僕は藤本先生にお会いしたこともありませんし

江沢 うゝむ……。馬場くん、起きろっ

馬場 アウっ

千葉 ええ……。寝てたんですか

馬場 んゝ、少々。入口

千葉 というか、幽霊も眠るんですね

馬場 そりゃそうよ。眠りあつての思考よ。眠らないとロクなこと考えない

わ

江沢 居眠りを正当化しない

馬場 はい

江沢 千葉くんの話を聞いた上で、導き出せる答えはひとつ。とにかく書けばいいんだ

馬場 そんなのわかってるわよねえ

江沢 いいかい、最終回は白紙なんだ

千葉 はい

江沢 これを「やりたいようにやれ」、そう捉えてみてはどうかね？

千葉 やりたいように……？

江沢 そう、「正解」ではなく、君の思うように

馬場 それで面白くなかったら？

江沢 君の責任だ、君が悪い

千葉 それは、……。そうですが。いや、でも今の僕には、何も浮かんでいな

い状態でして

江沢 だから、それは僕に考えがあると云っているだろう

馬場 そうよ、張り切っちゃってるんだから

千葉 その、考えってどんなものですか？

江沢 うん、「抜け穴」だ

千葉 抜け穴……って、抜け穴ですか？

江沢 ああ、古典的だがな

千葉 でも、抜け穴……

江沢 おぼろげな記憶だったが、この資料で確認が取れた。坂本竜馬が殺された近江屋の前の通り向かい、さほど距離のないところに土佐藩邸がある

千葉 あ、そうなんですか

江沢 ほら、確かに（資料を見せる）

千葉 本当だ。……で、それが何なんですか？

江沢 つまりはだ、近江屋の抜け穴は、土佐藩邸に通じる地下通路につながっていたと、設定してみよう

千葉 そ、それは……、通りの地下が、通路でつながっていた、ということですか？

江沢 ああ。それなら突然の襲撃にも脱出可能だ

千葉 そんな荒唐無稽な

江沢 千葉くん、最終回は白紙なんだ。荒唐無稽、実に結構じゃないかいや、でも、さすがに無理が……

江沢 （遮る）いいんだ！ 理屈なんて驚きの前では影をひそめるものさ
千葉 そうでしょうか……？

江沢 それから、影武者のハワイアン、彼は前回の終盤は何をしていた？

千葉 あ、竜田ですね。竜田はおりょうさんとの不倫がバレて、

馬場 え、不倫？ 不倫の話？

江沢 馬場くん、どうどう

千葉 バレた後に逃亡して、行方知れずになっています

江沢 うん、でかした

千葉 え？

江沢 これで僕のアイデアが通るぞ

千葉 そ、そうなんですか？

江沢 ああ。まあ、聞きたまえ。いいか、影武者は京都から逃げようとした時に、たまたま土佐藩士とバッタリ会ってしまい、保護を目的に土佐藩邸まで連れて来られてしまうワケだ。影武者は日本語は？

千葉 ほとんどしゃべれない設定です

江沢 うん。もう言われるがまま、土佐藩邸だ。そして、その影武者はたまたま地下通路を見つけてしまい、好奇心で進んで行ったところ、たまたまそこは近江屋で、まさに竜馬の絶体絶命の危機。そこで思わず身代わり……！

千葉 あ、いや、安孫子さん

江沢 なんだね

千葉 あのですね……、「たまたま」が多過ぎるように感じるのですが

江沢 そうかな？ 気のせいじゃないか

千葉 さすがに不自然じゃないか、と

江沢 全然。全然、不自然じゃないさ

千葉 でも「たまたま」が三回くらいありましたよ

馬場 千葉ちゃんの言う通りよ。恋において重なり過ぎる「たまたま」は、偶然ではなくリサーチのたまものよ。ねえ（千葉に）

千葉 えっと、その話はあまり関係が……

江沢 大丈夫。不自然だろうがなんだろうが、僕がペンを走らせれば、説得力がみなぎってくるさ！

千葉 え、ちょ、ちょっと待ってください。ホントに今ので書いちゃうんですか？

江沢 まあ、黙って見てなさい。というより、君が僕を止めたくても、触れないがな。はっはっは（笑いながら、書き始める）

千葉 あ……、ああ……

馬場 好きに書かせてあげなさいな。ダメならあとで直せばいいし。あ、千葉ちゃんがもしもの時は、直せないか。……あれ？ この作品って、作家が倒れて、ゴーストライターも大ケガして、って大分ピンチよね？

千葉 ええ。これ、他に書く人いるのかな……

江沢 その必要はない

千葉 え？

江沢 僕が書き切ってしまった方がいい。はっはっは（書き続ける）
千葉 はあ……

間。

千葉と馬場、ヒマ。

千葉 あの、こちらは長いんですか？

馬場 ええ、まあね。こっち（安孫子）はもっと古いんだから、ほら向こうが（長机の積まれた安孫子の原稿の「塔」を指差す）

千葉 ああ、あっちが安孫子さんの

馬場 こっちに来てから、ずーっと書いてるんだから

千葉 あんなに。どれだけ大長編なんだ……

馬場 ううん。一作一作をどんどん積み上げているみたい。ほら、互い違いになってるでしょう

千葉 あ、なるほど。でも、こんなに書き続けられるなんて、よくアイディアが尽きませんね。うらやましい

馬場 そうねえ。ただ、パターンは同じらしいわよ

千葉 え？

馬場 なんでも、フーテンやつてる陽気な中年男性が、悩みを抱えた美人に振られて、健気な妹になぐさめられるんですって

千葉 え……、えっと……

馬場 時代や場面設定だけ変えて、同じパターンで書き続けてるんだって。よく飽きないわよね

千葉 （「塔」を数える）……百近くある

馬場 ちよつと読んでみたら？ 一番上が最新作よ（原稿を取り、渡す）

千葉 はあ。じゃ、ちよつとご拝読……（読む）……え、ガーナ？ 舞台が

ガーナですよ

馬場 今度はガーナかあ

千葉 ガーナ人のアドウオアさんに恋してますよ

馬場 そりゃそうよ、一作に一人はノルマだもの

千葉 いや、でも……、ガーナ……、四角い国……

馬場 千葉ちゃん、あたしの作品読みたい？（自分の原稿を千葉に差し出し

て)

千葉 え？ えっと……

馬場 もし読みたかったら、読んでもいいよ（差し出している）

千葉 その……

馬場 本当、少しだけだからねえ（もう無理やり押しつける）

千葉 （受け取らざるを得ない）はあ。（パラパラと読む）……これはまた、随分カタカナだらけのお話で

馬場 あ、そう？ 気づかなかった

千葉 あらすじ、ってどういう具合でしょうか

馬場 えっとね、プファルツ系の傍系の出身でヴァーサ家のスウェーデン王女を母とするプファルツ・クレールブルク公カール・グスタフが従妹クリステイーナ女王とスウェーデン元老院の承認により、スウェーデン王位を継承する頃の悲しい恋の物語なんだけど、

千葉 ああ、ああ、大変

馬場 そもそもスウェーデン元老院はポーランドの脅威に対抗するために、グスタフ二世アドルフの異母兄弟カタリーナの子であるプファルツ・クレールブルク公カール・グス……

“ガチャ”

堂本（声） 千葉さーん、起きてます？ なんで電話出ないんですか

堂本、下手奥通路から出てきて、

堂本 ちよつと大事なご報告が（机に向かう江沢を見て）……おう？

江沢 ん？（書くのを止める）

間。

江沢 うん（また書き始める）

堂本 いやいやいや、ちよつと江沢先生、何してるんですか？

江沢 執筆中だ

千葉 ああ、ややこしいことに
馬場 いいわ。ややこしいわ
堂本 そうじゃなくて、何で江沢先生が……、あれ、千葉さんは？ どこ行き
ました？
江沢 (書き続ける) どこに？ そこにいるじゃないか
堂本 えっと……そこに？
江沢 (書き続ける) そ、こ
堂本 ……………？ (察して) あ、はい、わかりました、大丈夫です
江沢 うん
千葉 いや、大丈夫じゃないだろ！ ちょっと安孫子さん！
江沢 うるさいっ
堂本 えっ……、あ、はい、すみません、(千葉の持ち物や物色したり、床
に散乱した書類やジャッキーカルパスを整理する)
馬場 安孫子さん、入っちゃってるわね
千葉 えと、えと、これはどうしたらいいんだ？ ま、まず、僕の所在を伝え
てほしいんですが
江沢 うう…… (千葉をうなりながら睨み、そしてまた書き始める)
千葉 え、キレられてる……？
馬場 ジャマするからよ
千葉 いや、ジャマとかじゃなくて
堂本 あの、また、コンビニですかね
江沢 …………… (書き続ける)
堂本 結構前に電話したんですけど……
江沢 …………… (書き続ける)
堂本 出てから、大分経ちますか？
江沢 ええいつ、わかった！ 順番に話せ！
堂本 え、順番？ ……順番とは？
江沢 まずは君から、はいっ (千葉に促す)
堂本 え？
千葉 いや、あの、まず、安孫子さん。現状を再確認してほしいんですけど
江沢 そういうのはいいから、早く、本題っ
堂本 ……誰と話しているの？

千葉　じゃ、じゃあ、僕は今救急車で病院に運ばれたと伝え、
江沢　(遮る) 千葉くんはいま救急車で運ばれて病院だ。次、君っ (堂本に)
千葉　え
堂本　あ、あたし？ あたし、何かの順番？
江沢　さあ、質問、手短に
堂本　は、はい……え！ 千葉さん、病院？
江沢　そうだ。よし、もういいな。じゃ、終り (書き始める)
堂本　いやいやいや、ちよ、ちよっと！ ええ、ランプの魔神？
江沢　(書くのを止めて) ……どういう意味だ？
千葉　え、どういう意味？
馬場　いや、ちよっとこの娘、何言ってるのかわかんない
江沢・千葉・馬場　え、どういうこと？
堂本　……あの、だから、三つの願いの一つをただの質問で、って、そんな
ことより！ 千葉さんですよ！
千葉　そうですよ！
堂本　どこの病院ですか？
江沢　(千葉を見る)
千葉　いや、ちよっと……
江沢　知らん (また書き始める)
堂本　ええ……。 (スマートフォンで検索) この辺の病院だと……
馬場　とりあえず、伝えられたわね
千葉　ええ、最低限は。……あれ。堂本、なんで戻って来たんだ？
馬場　ああ、そういえばそうね
千葉　あの、安孫子さん。彼女に聞いてほしいことがあるんですが
江沢　……い、……や、……だ (書きながら)
千葉　安孫子さんっ！
江沢　何っ！ (書くのを止める)
堂本　何？
千葉　ひと言、「なんで戻って来た？」そう言ってください
江沢　「なんで戻って来た？」 (おざなりに言って、また書き始める)
堂本　え、今の質問？ 質問でした？
千葉　伝わったかな

馬場 どうかしら
堂本 ……あ、そうだ、あたし千葉さんに伝えなきゃいけないことがあって
千葉 お、おうっ。(江沢の耳元で)「代わりに私が聞こう」「代わりに私が聞
こう」
江沢 うるさーい！代わりに私が聞こうっ！(一旦、書き止めすぐ戻る)
堂本 え、あ、え？代わりに？
江沢 ううう(うなる)
堂本 いや、でも江沢先生にお伝えしても、

〃バン〃

江沢、机を叩き、

江沢 いいから！僕の身にもなれっ！
堂本 ……み？
馬場 ああ、やきもきするねえ
江沢 いいから。終わるものも終わらんぞ
堂本 はい……。いや、そもそもなんで江沢先生が、
江沢・千葉・馬場 いいからっ！(遮る)
堂本 なんだろ、この圧迫感。……じゃ、じゃあ、その、江沢先生には直接
関わりのない話なんですが、今回ご協力いただいているこの作品の……
何というか、「重要な位置を占める」あるシナリオライターが、先ほど
お亡くなりになったんです
千葉 え？
堂本 つきましては、千葉さんとご相談しなくてはいけないこともあって、
お話したかったんですが
馬場 これ、誰の話？
千葉 藤本……先生です、きつと
江沢 そういうことか(再び書き始める)
堂本 はい。でも千葉さんがどこかの病院に担ぎこまれたとなると、この作
品はもう……
馬場 ん、何を言っているの？
江沢 ゴーストの元が死んだんだ。死んだ人間の締切りをこれ以上延ばすな

んて、おかしな話だということだろう

堂本 ええ。今晚中に仕上げれば、書き上げた原稿が見つかったとか、まだゴマかしようはあるんですが、もう締切りは延ばせないで今日を逃すと雑誌の最終号には間に合わなく……

なるほど……

馬場 堂本 あれ？ なんで江沢先生がゴーストの件、ご存知なんですか？ え、千葉さんに聞いたんですか？

江沢 ああ、面倒だな（書きながら）

堂本 というか、だからどうして江沢先生が原稿を書いているんですか？ これは先生のお仕事じゃありませんよ（原稿を取り上げる）

江沢 ちよつと、おい！ 何をする？

堂本 ああ、ああ、勝手に書きちゃつて。もお……（ちよつと読む）これは……（さらに読む）

江沢 どうだ、いいだろう？ これで問題は、全て解決すると思うがね

堂本 土佐藩邸に「たまたま」竜田がいて、地下通路を「たまたま」見つけて、竜馬の危機に「たまたま」現れるなんて、「たまたま」が多過ぎて不自然ですよ！ どんだけご都合主義ですか！

江沢 ああいつ！（堂本に一撃を食らわす）
堂本 がっ……

堂本、気を失い、そのまま江沢にもたれかかる。

千葉 え！

馬場 ちよちよつ！ 安孫子さん！

江沢 あ。……つい、秘孔を突いてしまった

馬場 秘孔？

江沢 ああ、しばらくは気を失っているだろう

馬場 なんでこんなこと知ってるの？

江沢 昔、作品のために勉強したんだ。お詫びに便秘解消のツボも押ししておいてあげよう（堂本の頭？のどこかを押し「ブツ」）

馬場 あらあら

江沢 （堂本をベッドへ運ぶ）んっ、くっ……こいつ、重い。何食ってんだ。

馬場くん、脚持ってくれ

馬場 持てませ〜ん

江沢 (運びながら) くそ、そうだったな、つと(半ば、ベッドへ投げる) ふい〜。食い過ぎだっ……よしっ(また書き始める)

馬場 え、まだ書くの？

江沢 締切りは今晩中だ。早く書かないといかんだろう

馬場 大分編集からダメが出てましたが

江沢 何、敵と同じくらい味方もいるものさ。とにかく書き上げてしまえばいい(書き始める)

馬場 前向きねえ。……あれ、千葉ちゃん？

千葉 え？

馬場 どうしたの、急に静かになつて

千葉 いや……、藤本先生、お亡くなりになったと聞いて……

馬場 あ、なんだ、そんなことか

千葉 そんなことって

馬場 だって、私たちにとって、死ぬのは日常だしさ。それに千葉ちゃん、家族でも何でもないんでしょ

千葉 それはそうですが、ファンとして、それなりに喪失感もあったり

馬場 いいなあ。うらやましい〜

千葉 うらやましい？

江沢 (書きながら) 見ず知らずの人間に、そこまで悲しんでもらえるんだ。死んだ人間も本望だろう。迷惑なくらいな

千葉 ……………

江沢 (書きながら) 藤本氏は、会ったこともない人間に愛され、死を悼んでもらえる。これほど幸福な物書きの人生もないだろう。我々とは違う。そういうことさ

千葉 ……そう、ですな

江沢 (書きながら) 気落ちしてる場合かね

千葉 え

江沢 僕はね、竜田が竜馬の身代わりになって、果てるどころまでしか考えてないぞ。その先は全くもって真っ白だ。君がボヤボヤしていると、藤本氏の遺作は未完のまま終わるぞ

千葉 未完……

江沢 全国のファンは死を悼みながらも、「オチは？」と不満を抱えることだろう。そうさせないためにも、君が藤本氏らしいオチを考えなさい

千葉 ……はいっ

江沢、書き続ける。千葉、隣で考え込む。

間。

堂本、ベッドから起き上がり、下手側にある冷蔵庫を開き、ビールのタブを起こす。

“プシュっ”

江沢、千葉、気づいて堂本を見る。

堂本と目が合う。しばし。

千葉 え？

堂本 ん？

千葉 起きた？

堂本 まあ、起きた、と言えば、起きたかな

千葉 身体は大丈夫？

堂本 うん、なかなか好調

千葉 そっか。でも、起きざまにビールというのは……

堂本 飲みたかったんだもん。千葉ちゃんも飲む？

千葉 いや、俺はそれどころじゃ……、千葉……ちゃん？

江沢 馬場くん、何やってるんだ？

堂本 スーパードワイを体内に流し込もうとしておりやす

千葉 え？馬……場？

江沢 そうじゃなくて

堂本 (ビールを飲み) プハー

江沢 うまそうだなーっ

堂本 生き返るうー

千葉 ちよ、馬場さん？

堂本 ムリムリ、生き返るのは、無理。はっはっは
千葉 いや、あの

堂本 ジョークジョーク、幽霊さんジョーク

江沢 馬場くん、我々は今ギリギリのところまで奮闘しているんだ。そんなことやっていない場合じゃないだろう

堂本 だってあたし、そんなおじさんによるおじさんのためのお話、力貸したくてもできないもの

江沢 それは、そうかもしれないが、だからと言って……

堂本 ま、ま、あたしに構わず、どんどんやってくださいな。こっちはこっちで静かにやってるんで

江沢 ん、ん……（飲みたそうに堂本のビールを睨む）

堂本 いいからいいから

千葉 安孫子さん、ここは言う通りに、ね

江沢 ん……（飲みたそうだが、再び書き始める）

しばし、江沢、書き、千葉、考え、堂本、飲む。

堂本、上手丸テールへ行き、ジャッキー・カルパスを手取る。

包装を広げる際、音がする。

江沢、振り返る。

江沢 ジャッキー……カルパス……

堂本 ……あったので

江沢 なぜ……？

江沢、堂本、そろって千葉を見る。

江沢 お前かつ！（怒）

千葉 いや、怒られる意味が……？

堂本 千葉ちゃん、絶好のおつまみをありがとう

千葉 そんなつもりじゃ

江沢 千葉くん

千葉 は、はい

江沢 ストレスを抱えた状態でモノを書くのは、逆に効率が悪いと思わないかね？

千葉 はい、思いますが、お酒は飲んじやダメです

江沢 ……………

千葉 さ、書きましょう

江沢 ん〜……（飲みたそう）

しばし、江沢、書き、千葉、考え、堂本、飲んだり食ったり。

堂本、二本目を取りに、下手の冷蔵庫へ行き、二本目を開ける。

“プシュっ”

江沢 馬場くん！（堂本に近寄り）……柿^oピーもあるぞ！

千葉 こらあ！

江沢、バッグから柿^oピーを取り出し、堂本に寄る。

堂本から、ビールを受け取る。

千葉 ちよつと！

江沢 ままま、ちよつとだけ。ちよつとだけだから（まだ飲んでいない）

堂本 あのね、千葉ちゃん。あたしたち、普段は飲み食いでできないの、身体ないから

千葉 は、はい……？

堂本 飲んだり食べたりできるのって、生きてる人の特権なのよお

千葉 いや、だからって

堂本 それにめったにないのよ。このシングルの部屋に、無意識の人間が二人もいるって

千葉 そうかもしれないが

“プシュっ”

江沢、ビールを開ける。

千葉 あっ

江沢 (ビールを一気に飲む)

堂本 安孫子行ったー！

千葉 どうすんだ、原稿おー！

照明、音響、派手めに盛り上がる。

セリフはなくなり、堂本、江沢、飲み食いしながら盛り上がる。

千葉、二人を止めようとするが、触れないのでどうにもできず、焦る。

そして、フェードアウトで暗転。

間。

明転。

丸テーブルに置かれている、空になった柿ピーのビン。

そこら中に散乱している空き缶の数々。

そして、ベッドで横になっている、江沢と堂本。

それを傍らで立って見ている千葉。

長机の椅子に座っている、中央に安孫子、上手寄りに馬場。

千葉 ……どうするんですか

安孫子・馬場 ……

千葉 まだ書き終わってないですよ

安孫子 もう少し、しっかりしていると思っただけがあ

千葉 は？

安孫子 どれだけ元気そうにしても、内臓だけは若づくりできないもん

なんだなあ？ (馬場に)

馬場 そうね。でも、若いだけでもダメよ。この娘、こんなにお酒弱いと思

わなかった。ちよつとよ、ちよつと飲んだだけなのに

千葉 ちよつと……？ (空き缶の数々を見渡す)

安孫子 いや、しかし、なかなか痛快なアルコール摂取だったな

馬場 ね。二人で酔いつぶれるまで飲むなんて、初めてじゃない？

安孫子 確かにな

馬場 安孫子さんがあんなにノリノリなの、初めて見たあ

安孫子 馬場くん、このお

安孫子・馬場 あっはっはっは(笑)

千葉 おおーい！原稿！まだ終わってないんですよ！やらないといけないんですよ！

安孫子・馬場 ……………

千葉 さあ、どちらでもいいから、戻ってください

安孫子・馬場 無理無理無理

千葉 なんで？

安孫子 酔いつぶれるほど苦しいものはない。わざわざそんな身体に乗り移れだなんて、君、殺生だぞ

馬場 そうよ。死んだ人間に、死にたくなるような苦しみを与えるつもり？

千葉 でもですね、まだ原稿が、

安孫子 乗り移ったとしても、こんな身体じゃ何も書けやしまい

馬場 フラツフラだもの

千葉 じゃ、じゃあ、どうしたらいいんですか……

安孫子 それに

千葉 はい？

安孫子 君だって、この続きであるオチを考えてないだろ

千葉 ……確かに、まだ

安孫子 アイディアがなければ何も進むまい。まず君は続きを考えろ、僕は寝る

千葉 え、ちよ、ちよっと

馬場 あたしも眠い

千葉 いや、だって、乗り移る身体の方が、何にも解決してないじゃないですか

安孫子 アイディアが先、身体は後。僕は寝る

千葉 いや、後って、先送りしてるだけで、どうにもならないでしょう

安孫子 んー、どうだい、馬場くん？

馬場 んー、どうかしらね、安孫子さん？

千葉 何も考えてないでしょっ。だから飲んじゃダメだっけって言ったじゃないですか。目先の欲を優先させた計画なんて、実現されるはずないんですから。そもそも馬場さんが堂本に乗り移るなんてことするから、こうなつたんですよ。それに、そもそもを言えば、安孫子さんが幼稚に逆上し

て、堂本の気を失わせるからいけないんですよ。それから……、それから……、

間。

千葉 ……いや、ちがう。……そもそも、僕がちゃんと書け上げてなかったからだ。

馬場 千葉ちゃん……

千葉 いつもだ。いつもこうだ。何か起きれば言い訳して、人のせいにして、少しでもその場限り楽になろうとして、時間が経てば忘れたフリをして……。こんなこと、何回繰り返すんだ

安孫子・馬場 ……

千葉 ……僕が脚本を書いている劇団、休団しているって言ったでしょう。あれ、お金がどうかとか、生活がどうかとか、そういう理由で行き詰まったことになってるんですけど、本当はわかっているんです。僕が、面白いホンを書けなくなったから。それが理由なんです。それを誤魔化して、誤魔化して誤魔化してさんざん言い訳しているうちに、いろんなものが噛み合わなくなっていく。でも、僕にはもう、どうすることもできなくて……

安孫子・馬場 ……

千葉 馬場さん？ あび……

安孫子・馬場 Z z z z ……

千葉 寝てる……？ ええ？

千葉、オロオロしながら、どうしたらいいか部屋を探る。
しかし、やがて諦める。

千葉 八方ふさがり、か……（ベッドに腰掛ける）

間。

江沢 （上半身をむくりと起こし）……なるほどな

千葉 え？

江沢、ベッドから起き上がり、部屋の様子を窺いながら、

江沢 ここだったかあ……

冷蔵庫にビールが入っているか確認する。

そしてやがて、手前長机の中央椅子の位置へ。

江沢 君、ちよつと、彼を持って

千葉 え？

江沢 彼をどけようか

千葉 え、は、はい……

千葉、安孫子を中央椅子からベッドへ、何とかどける。

江沢 うん

江沢、中央椅子に座り、原稿や書類・シナリオ雑誌を読み始める。

千葉 あの、江沢先生……？では、ないか。しゃべれて……え、でも（安孫子と馬場を見る）……あれ、え？

江沢 お、抜け穴。そう来たか。君い、ベタだね〜（千葉に）

千葉 いや、それは……（安孫子を指差す）

江沢 君、名前は？

千葉 え、ち、千葉、真と言います

江沢 「まこと」はどういう字？

千葉 真実の真です

江沢 はいはい、なるほど。真実の真、か。くう〜、名前つてのはいつの時
代も重いねえ

千葉 はあ

江沢 いや、改めて千葉くん。三話四話五話と、どうもありがとう。おかげ

で物語が死なずに済んだ

千葉 ……藤本、先生？

江沢 ああ、いかにも。どうやら私ね、死んじゃったね。はははは(笑)

千葉 え、ちよ、え？ それは、ご愁傷さ、いや、違うな

江沢 ははは、お気になさらず。いやね、そのまま成仏しちゃってもよかったですんだけど、これだけちよつと気がかりでさ。浮遊して原稿探してたんだよね。ここかあ

千葉 浮遊して、って、移動できるんですか？ でも彼らは……

江沢 彼らは(見る)、地縛霊でしょ。私は浮遊霊。それで終わったら成仏するから安心して

千葉 そういふもんですか

江沢 うん。……あれ？ ていうか、千葉くん、死んでる？

千葉 いや、まだ、かろうじて……

江沢 あ、そう。なんか大変だね。驚いちやうよ。はははは(笑)

千葉 いや、笑い事では……。あれ？ あの、身体、大丈夫ですか？

江沢 大丈夫じゃない、死んでる(笑)
千葉 そうではなくてですね、その身体、悪酔いしてまともな体調じゃないハズで

江沢 千葉くん。闘病に比べたらね、これくらい何でもないもんさ

千葉 そう、ですか

江沢 じゃ、続き書こうか

千葉 え、はいっ

江沢 しかし君、まじめだね。私のメモ通り、忠実に書いてるもんなあ。

ダメだよ。もつと物語に揺さぶられなきや

千葉 はい……

江沢 まあおかげで、続きは書きやすいがね。しかし、抜け穴！ 抜け穴かあ。くう、やるねえ(千葉を指差す)

千葉 いやそれは、こちらの地縛霊の安孫子さんが

江沢 へえ、いいよ、安孫子さん！ アンタ、力強い！ ブルドーザーみた

い！ ブルドーザー安孫子！ ブルドーザー安孫子！

千葉 あの、これは藤本先生が考えていた通りの展開ですか？

江沢 全然。全然違うよ。でもこっちの方が面白いから、ここまま書いちゃ

います（書き始める）

千葉
はい……

江沢
ただね、これはいただけない。死ぬのは、竜田ではなくて、竜馬です、と（どンドン書き進める）

千葉
え、あ、でも、それじゃあ、この後の展開が、

江沢
展開？ 展開するよ。竜田のその後は、とんでもなく広がって行くんだから

千葉
そうなんですか？

江沢
うん。それに千葉くんね、死んでしまった人間の「もしも、生きながらえたら」を考えるのはさ、かわいそうだよ。そっと死なせてあげようよ

千葉
はい……。でも、竜田にその後の展開があるとは、ちよつと……

江沢
あれ？ 千葉くん。君、ハワイをただの陽気な観光地と考えてないかい？

千葉
え。まあ、当時は観光地じゃないでしょうが、陽気な土地柄だとは……

江沢
違うんだなあ。ちつがうんだよなあ。ハワイもまた、悲しい歴史の上に今があるんだよ

千葉
悲しい歴史、ですか

江沢
江戸幕府が侵略を受けて、それまでの生活を捨てさせられたように、ハワイも同じ歴史を歩んできたの。日本よりもひと足先にね。ほら、ハワイの方があの大国と近いからさ

千葉
ああ、そうなんですか

江沢
竜田はね、大国への反抗勢力の一員だったんだけど、力及ばず敗北して、逃亡。漂流の末、日本の長崎にたどり着き、そこで竜馬に出会ったと、そういうワケさ！

千葉
そうだったんですか

江沢
だからっ、だからねっ、この物語の最後は、幕末の志士の生き様に勇気を得た竜田が、母国ハワイに戻って、再び戦い出すところで終わるんだ！ どうだい、かっこいいだろう！ かっこいい！

千葉
藤本先生

江沢
ん？

千葉 よくしゃべりながら書けますね

江沢 (ずっと書き続けている) ん……ああ、ノッてるからね

千葉 そう、ですか

江沢 そう！なん！です！っと！最終回ほど、テンション高く。こうで

ないと。はははは(笑)

千葉 ははは……。あ、最終回の、メモ……

江沢 うん？

千葉 あの、最終回だけ、メモがなかったんですけど、あれはなぜですか？

江沢 ああ、あれね。さつきも言ったろう。物語にさ……、揺さぶられたいからだ

千葉 揺さぶられたい？

江沢 物語ってのはさ、書いてるうちに思いも寄らぬ方向に進み出すものだろう？

千葉 え、えっと

江沢 進むのっ。でね、展開やラストはさ、決まっていた方が安心なんだけど、私はね、自分で書いているハズなのに、自分でも思いも寄らない方向に引っ張られたいんだよね

千葉 なるほど……

江沢 その「思いも寄らない変化」を楽しむために、あえて最後の展開は、頭の中でボンヤリとさせておくんだ。メモとか書きちゃうとき、予定通りに終わらせちゃいそうで、面白くないんだよね

千葉 ああ……？

江沢 千葉くん、わかるかい？これはね、作者だけの特権ってヤツだよ

千葉 考えたこともありませんでした

江沢 決まっていないと不安だけど、決まってしまうって面白くない。人生とおんなじさ

千葉 …………… (返事のしようもなく、照れる)

江沢 決まっていないと不安だけど、決まってしまうって面白くない。人生とおんなじさ

千葉 ……あ、……あの (やはり返しようがなく、照れる)

江沢 決ま(切り替えて)さあ、じゃあ、そろそろ執筆に集中させてもらおうよ。最後の執筆だ。しゃべりながらでは格好が付かんからね

千葉 それは、はい、確かに
江沢 よし……っ（執筆に集中する）

音楽、照明が切り替わり、ゆったりとしつつも盛り上がる。
そして、フェードアウトで暗転。

明転。

長机で執筆してた江沢が、堂本に変わっている。

千葉、ソファに腰掛け、それを見守っている。

堂本 （伸びをしながら身体を確かめる）ん〜、やっぱり違うね、若者は

千葉 そういうものですか

堂本 うん、全然。関節が違う。こつちを経験したらね、もうそつちには戻れないよ。うほ〜、なめらか〜（何かなめらかな動きをしながら）

千葉 （江沢を見て）大丈夫ですかね？

堂本 どうかな〜。痛かったもんなあ。ピキッて。急にピキッと来たからねえ。（江沢に寄って説明）ここね、ここ。ここがピキッと

千葉 スジですかねえ

堂本 スジだろうねえ。おじいさんも大変だよねえ

千葉 あの、男は男にしか乗り移れないワケではないんですね
堂本 違ってみたかね。いや、しかしね、声が高い。よく通る。しゃべるのが

楽だよ、千葉くん

千葉 そうですか……

堂本 女性がおしゃべりなのは、この声の出し易さにあるね
千葉 なるほど

堂本 あ、あ！今ならさ、高音が出なくて唄えなかった歌も唄えるんじゃない？
千葉 唄えるんじゃない？

千葉 ああ、そうかもしれない……

堂本 （完全に食いながら唄い出す）

ダイヤル回して 手を止めたー

I'm just a woman Fall in love

……出るねえ、「たー」出るね、「たー」

千葉 あの、先生……

堂本 次、次何唄う？

千葉 いや、その原稿の方をですわね……

堂本 ……わかってるよ。書きます、書きますよ。（席に座りながら）死んでも尚、原稿の催促。因果なものだ

千葉 よろしくお願いします

堂本 ん。

堂本、書き始める。

間。

堂本 （以降、書きつつ）……君さ、私のこと好きでしょ？

千葉 え……？

間。

堂本 ん？……いやね、君が書いてくれた回（シナリオ雑誌を指す）、ザッと目を通したけど、私が書きそうなセリフばかり書かれていたからさ。これはね、熱意を持って研究しないと、こうはならないと思ってね
仰る通りです。何度もドラマを見て、シナリオも読みました

堂本 うん、私もそうだ

千葉 え

堂本 私もそうやって追っかけていた作家がいた。そして、その人を真似た。私の作品は、そういうところから出来ている

千葉 そう、だったんですか

堂本 私が受け継いだものは、ちゃんと後世に送られている。……悪くない気分で死ぬそうだし

千葉 先生……

堂本 頼んだぞ

千葉 あの

堂本 あ、でも君、死にかけか

千葉 そうなんです

堂本 え、ダメじゃん。死んだらダメでしょ

千葉 そうですよねえ。でも僕にはどうにも……

堂本 何だろ、スクワットとかしてみたら？

千葉 スクワット？

堂本 ほら、血行が良くなるかもしれないじゃないか

千葉 血行……ですか？

堂本 いい。もういい。知らない。待機。はい、できたよ（原稿を差し出す）

千葉 ええーっ、このタイミングう？

堂本 だって書けたんだもん

千葉 （原稿をサラッと読む）うわ、ホントだ。ちゃんと終わってる

堂本 さすがだろう

千葉 はい（読む）

堂本、長机の原稿タワーを眺める。

堂本 あのさあ、これ、地縛霊の彼らが？

千葉 ……え。あ、はい、彼らがこちらの世界で積み上げた原稿らしいです

堂本 へえー。どんな話なの？

千葉 えっと……、向こうがガーナの話で、こちらがカタカナの話です

堂本 えっ？（興味津々に馬場の原稿を眺める／触らない）……おお、これ

はまた（笑）「カタカナって何語だっけ？」って気持ちになるねえ

千葉 そうですね

堂本 プファルツ・クレールブルク公カール・グスタフ（笑）いいよお、書き

たいものを書いているのが伝わって来る

千葉 ああ、それは確かに

堂本 ふーん、なるほどねえ。（視線を原稿から、安孫子・馬場へ）この部屋に地縛しているところを見ると、締め切りに間に合わず、先を断られたクチかなあ

千葉 そう、なんででしょうか……？

堂本 いや、わからないけどね。でも、彼らがここにどれだけ原稿を重ねても、成仏することはできないと思うなあ

千葉 そう、なんですか？

堂本 作品というのはね、つくるだけじゃダメなんだ。たった一人でもいい

から、誰かに届けないと

千葉
………

堂本 作家の無念は、認められないことでも、報われないことでもない、誰かに届けられなかったことにある。私はそう思う

千葉 ……はい

堂本 生きてるうちだけだぞ。何かをつくって、誰かに届けられるのは
千葉 ……

堂本 だからね、千葉くん。何とかして生きなさい

千葉 ……わかりました

堂本 うん。わかればよろしい

堂本、下手側の冷蔵庫へ寄る。
間。

堂本 ……ねえ、センパイ？

千葉 え？

堂本 センパイ、あたしのこと、好きでしょ？

千葉 ……堂本？

堂本 ……ぷふうー！（笑）ウソウソ、大丈夫。まだ中身ジジイ。オス、オス

千葉 ……え、ちよ

堂本 （千葉のモノマネ）……堂本？

千葉 やめてください

堂本 （千葉のモノマネ・変なポーズ付き）……堂本？

千葉 やってない

堂本 （変なポーズの延長で悪ふざけ）

千葉 先生

堂本 千葉くん。好きって言うってもらって嫌がる女なんていな〜いぞっ

千葉 先生、女性像に大分偏りが……

堂本 私も、ずっと前から、センパイとゴリラのことが好きでした

千葉 怒りますよ

堂本 でもね、大事なことだと思うよ（ビールを取り出しながら）

千葉 何がですか？

堂本 ん、ほら、気の持ちようと言うかさ

千葉 はい？

堂本 君さ、私がここに来た時、ひとりで嘆いていたろう？

千葉 えっ、い、いたんですか？

堂本 うん。私は君の状況がどうなっているのか知らないが、(ビールを開ける)千葉くん、作家だろうがなんだろうがね、自分のためにできる苦労なんて、たかが知れているものさ

千葉 ……………

堂本 だから、誰かのために、もう少しだけ頑張りなさい。今回、彼女のために頑張ったように

千葉 え？ ……いや、いやいや、別にこの仕事は堂本がどうこうじゃなくて、先生の遺作をこのまま、

堂本 (遮り) はいはい、うるさいうるさい、知らない知らない。民主主義の世の中だ。キッスだろうがベッジングだろうが、好きにしたらいいじやねえか。私は、成仏するよ

千葉 え、ちよ、ちよっと

堂本 それでは皆さま、お疲れさまでした。はい、乾杯……！

堂本、ビールを飲む。

暗転。

間。

明転。

朝。

部屋の中にいるのは、ベッドの上の堂本と江沢だけ。

そして、堂本が起きる。二日酔い。

堂本

(自分の不調を確認しつつも、隣に江沢が寝ていることに驚く。二度見する。自分が一夜の過ちを犯してしまっていないか、焦り、下着とか確認する) 大丈夫、多分大丈夫。さすがに大丈夫

堂本、手前長机の原稿に気づく。手に取り、めくって読む。

堂本 あれ？ え？ ……書き終わってる

そして、江沢、起きる。

堂本、警戒する。

江沢

(起き上がろうとして、首スジがピキッと痛む) あっ…… (痛い、再びトライ) あっ、ピキッ…… (何とか起き上がる) うう……ピキィ…… (丸テーブル上の空になった柿ピーのビンを発見し、ショックを受ける。そして堂本を見つけ、疑い、鋭く睨みつける)

堂本、江沢、警戒し合っている。

そこに堂本の携帯電話に着信がある。

“(着信音)”

堂本、江沢を警戒しながら、電話に出る。

堂本

はい、……あ、お疲れさまです。……え、千葉さんが？ ……はい、聞いたような、聞いてないような。で、どこの病院ですか？ ……わかりました。会うことはできるんですよね。……はい

堂本、電話をしながら荷物を持ち、下手奥通路へ出て行く。

江沢、警戒したまま姿勢を崩さない。

暗転。

間。

明転。

後日。夜。

下手奥通路より、堂本に支えられながら、千葉が出てくる。

千葉、結構重傷。包帯やらギプスやら松葉杖やらを身につけている。

堂本

やっぱりまだ早いんじゃないんですか？

千葉

そうかもね

堂本 それに、別にここじゃなくても書けるんだし

千葉 いや、ここじゃないと

堂本 今回は私的に使うんだから、有料ですよ

千葉 はいはい、そりゃもちろん

堂本 じゃ、私はこれで。この部屋にあまりいい印象ないんですね（部屋から出て行くようにする）

千葉 あ、あ、堂本。ちよっと待って

堂本 はい？

千葉 ちよっとそこで眠ってくれる？

堂本 ……は？

千葉 二、三時間でいいから

堂本 ……（警戒する）

千葉 ……ん、いやいや、そうじゃない。そういう意味じゃない

堂本 え、いや、でも

千葉 いやいや、違う違う。ホントに。ホントに、今日はそういうんじゃない、
く、

堂本 今日は？今日はって？

千葉 いや、その、ほら、彼らの作品を書くというか……、ん、とにかく

寝て

堂本 寝れるかー！

千葉と堂本、言い合いをゴチャゴチャ続ける。

安孫子と馬場が現れて、混ざってゴチャゴチャしゃべり始める。

煩わしく、にぎやか。

（終）